

「キツネのジャガイモ」—野生と栽培のあいだで—

国立民族学博物館 名誉教授 山本 紀夫

ジャガイモの故郷は、ペルーからボリビアにかけての中央アンデスの高地であるが、この中央アンデス高地で現地の人たちが「キツネのジャガイモ」とよぶジャガイモがある。もちろん、これはキツネが栽培しているジャガイモではなく、人間は食べないジャガイモという意味である。そのため、地域によっては「キツネのジャガイモ」ではなく、「犬のジャガイモ」と呼ぶところもある。どちらも栽培種ではなく、野生種であり、小指大ほどの小さなイモをつけるが、有毒で苦くて食用にはならない。そのため、「キツネのジャガイモ」とか「犬のジャガイモ」と呼ばれるわけである。

この野生種には面白い性質がある。路傍やゴミ捨て場、ジャガイモ畑の周辺、さらに墓など、いわば人臭い環境で目立つのである。なかには、インカ時代に築かれた石壁の隙間から生えているものもある。場所によっては、野生のジャガイモだけで大きな群落をつくっていることもある。そのため、この野生種は純然たる野生種とは區別されて、雑草型と言われる。雑草といえば、日本では邪魔な植物あるいは役に立たない植物といったイメージがあるが、ここでいう雑草型はそれとは異なり、人間が攪乱した環境に生育する植物のことである。さらに、面白いことに、ジャガイモの栽培種はこの雑草型の野生種から生まれたとされる。そして、ジャガイモの栽培種には7種あるが、これらの祖先種も雑草型なのである。これらは、まさしく雑草のように畑な

どのなかにも侵入してくることもある。

このように中央アンデス高地で雑草型のジャガイモが目立つほど多く自生しているという事実は、ジャガイモの栽培化を考える上で興味深いことである。まだ農耕を知らず、狩猟採集で食糧を得ていた人びとにとって野生のジャガイモが魅力的な食べ物に映ったと考えられるからである。最初のうちこそ、彼らは野生のジャガイモを探し求めてアンデス高地を広く歩き回っていたのかもしれないが、やがて野生ジャガイモのなかに、彼らがつくった踏み跡やキャンプのまわりなどに侵入してくるものが現れる。踏み跡のまわりやキャンプには人間の排泄物が残されることになるが、そこには窒素をはじめ、様々な物質が含まれている。このような物質、とくに窒素に対して適応した、いわゆる好窒素植物もやがて生まれてくる。こうして、野生種の中にも攪乱した環境のみに生育するもの、すなわち雑草型のジャガイモが生まれるようになったと判断されるのである。

最近、この雑草型のジャガイモに関して残念なことがおこっている。先述したように雑草型のジャガイモはインカ時代の遺跡にも侵入しており、それを見るのが私の楽しみであったが、それが近年観光客の増加とともに急速に姿を消しているのだ。雑草型のジャガイモは、遺跡を管理する人間にとっては雑草以外の何者でもないせいで、きれいに除草されてしまったのである。